〔書　評〕

九州方言学会『九州方言の基礎的研究』

加藤正信

ここでは、先に出版された本書の内容のあらましを述べ、それに若干の疑問、要望、学界における位置づけなどを加えるという新刊紹介的な筆をとらせていただく。評ができるほどの力のないことのほか、大部な書物ゆえ、まだ細部まで熟読、吟味し終えていないという事情もあって申し訳なく思う。

本書は、九州方言学会が、九州全域（奄美諸島を除く）の方言を、基礎的かつ総合的観点から大規模な共同調査研究を行なった結果の詳細な報告書である。

まず、本書を手にしたときの感想は、九州はもちろん、他の地方にまだ類書を見ない画期的なものであるということである。もっとも、琉球では、すでに平山輝男氏とその門下による『琉球方言の総合的研究』（昭41年）、『琉球先島方言の総合的研究』（昭42年）があり、最近『薩南諸島の総合的研究』（昭44年）も刊行されているが、のちに述べるように、研究組織の点で違うとも言える。なお、本書に奄美諸島がはいっていないのは、右の『薩南諸島の総合的研究』の言語の部である程度補うことができよう。さて、中国地方では広戸惇『中国地方五県言語地図』（昭40年）があるが表題の通り地図集である。近畿方言学会『近畿方言の総合的研究』（昭37年）は、一応の統一はあるが、各研究者ごとの記述の集合である。奥里将健『四国の方言』（昭18年）、小林好日『東北の方言』（昭19年）はともに戦時中の古いものであり、規模や性格の点でも差がある。関東・中部地方にいたっては、これに当たるものをあげることができない。

「序説」によれば、九州方言学会なるものは、(1)九州方言の研究家の組織を作ること、(2)その当面の仕事として九州方言の総合的もしくは基礎的な共同調査研究を企画実行すること、の二点を目的として昭和三七年に誕生、二年の準備ののち、昭和三九、四〇年に文部省科学研究費を受けて調査を実施し、さらに整理に二年をかけて刊行に至ったものという。この調査研究には、秋山正次、石坂正蔵（代表者）、糸井寛一、岩本実、岡野信子、小野志真男、鏡味明克、上村孝二、神部宏泰、工藤敬一、後藤和彦、篠崎久躬、都築頼助、西島宏、野林正路、原田章之進、松田正義、吉町義雄、小野米一、五味克夫、瀬戸口俊治、瀬戸口嘉昭、福田良輔、愛宕八郎康隆の二

四氏が従事し、また執筆を分担している。歴史の専門家と思われる二氏以外のほとんどは、著書や論文などで国語学徒にはなじみ深い方々である。このような方言研究の一流メンバーが、これだけの数結集して統一ある方針のもとに調査を行ない、記述をするということは、いままでは、国立国語研究所の地方研究員制度以外に考えられないことであった。この意味からも画期的なできごとであると言えよう。

題名は「総合的研究」を避け、慎重を期して「基礎的研究」とし、まず、学界への資料提示を第一に心がけ、解釈や関係づけをおさえた客観的な記述を目ざしている。本書は、「広域調査研究」「集中調査研究」「文献調査研究」の三章から成っている。次に、各章に即して内容を紹介する。

「広域調査研究」は方言分布調査にあたり、九州全域一七〇地点において、老年（六五～七〇歳の男子）と、少年（中学三年の男子）のおのおのにつき、音韻六〇、アクセント五〇、文法七〇、語辞三二の計二一二項目を調べたものである。これらにつき、まず、各地点の各項目のほとんどすべてを語形一覧表にし、資料を読者に提示している。これは精密・良心的なものであるとともに、「老」「少」を左右見開きページで対照させてあってわかりやすい。

次に、これらのうち三三項目を選んで分布地図に示している。うち八項目は「老」「少」を左右に対照させており、世代による変化がすぐに感じられる。たとえば、「火事」の kwa の音の分布は、国立国語研究所『日本言語地図』第3図とまったく一致していて両書の正確さに驚かされるのはともかくとして、少年におけるこの音の急速な消滅は本書によってはじめて知られる。一方、「来い」（命令）、「せよ」（命令）などは少年層でもほとんど分布に変化のないこと、「行かなかった」（打消の過去）の方言分布相は、ある地方から、またある語形から次第に変わりつつあることなどが手にとるように感じられてくる。なお、分布図について欲を言えば、「大根」（ai）と「時計」（ei）との両項目で訛音形の符号を共通にさせるともっと見やすかったと思われる。

音韻は一項目一語例中心とし、同じ音を含む数語が補例としてついている。その一語例が九州方言の訛りを見るに適当であったかどうかという問題も残ろう。期待される訛音形が見えないのは語例のせいか、昭和三九、四〇年という時点における共通語化のせいか解釈が分かれよう。なお、項目表示に、'eNpicu cu'e 'osiro] などと音韻記号のようなものを使っているのは見にくいだけでなく、音韻だとすると理論的根拠がわからない。

アクセントは二音節名詞に限ったが、多数の調査員の耳による記録の不統一を反省してか、公表を見合わせているのは惜しい。各調査地点での調査の問答を録音しておき、あとで皆が、あるいは責任者が判定を下すという提案をしたいがいかがなものであろうか。

文法は一項目一文例中心であるが、項目としてはかなり尽くされているようである。なお、「『今日は雨だった』をここのことばで言えばどうなりますか」だけの質問の項目表示が「ダ・ジャ・ヤ」とあるのには少し抵抗を感ずるが、結果の方は「ジャッタ」「ヤッタ」「アッタ」「ダッタ」などと出ているので実質的な不都合はないようである。

語辞は比較的少数項目である。278ページに一応項目選定の基準が示し

てあるが、多すぎて結局は基準がないような印象をもうける。ただ、第(8)基準の『日本言語地図』と重複しないというのは、調査地点密度がそれよりやや粗いだけにもっともな理由である。なお、語辞の少年層の結果が一覧表と分布図からまったく省かれているのは惜しい。各項目に、「老」「少」の差を、◎（激変）、○（中度の変）、△（不変）の記号で示してはいるものの、地理的な様相がつかめないので困る。県別に語形の数量表示をしているが、これでも分布としては不十分であろう。

広域調査研究の終わりに、これから得られた資料を有機的に関連づけておく意味で、各県別に、音韻・アクセント・文法・語辞の部門を設け、その中にまた小項目を立てて、各県とも統一した方法により要領よくまとめている。これには、さきほど提示されなかったアクセントもはいっている。そして、最後にこれから帰納される九州方言の総括的解説を行なっている。これは、特に他地方在住の研究者や、方言研究者以外にとって便利なものである。

しかし、このような構成は基礎的ということが、言語地理学や方言区画論など、いろいろな試みのための分布資料提示でないことを暗示しているようである。それらの特定研究のためなら、新たにそのための調査を企画しなければならないことは、資料自体からも感じられるのである。すると、本書の分布調査は、結局は九州方言の概括的把握のためであって、それゆえ、「分布」とか「地理的」とかいう用語を避けて、「広域調査」という名称を用いたものと思われる。この全体的把握と見通しまでが実は基礎なのであって、種々の研究の企画はこれを踏まえてなされるものであるとすれば、広域調査による資料提示自体は、そのような全体的把握という基礎的なものを証明するための根拠ないし手続きの段階と解してよいのであろうか。

「集中調査研究」はほぼ構造言語学的方法によって特定地点の言語体系を調査、記述したものである。これには次の四地点が選ばれている。

(1)大分県直入郡直入町長湯
(2)佐賀県佐賀郡富士町北山
(3)熊本県牛深市牛深町深海
(4)鹿児島県揖宿郡山川町岡児ケ水

現在の方言学の常識では、九州方言は大きく、豊日、肥筑、薩隅の三方言に分かれるとされている（東条操『日本方言学』など）。もし、それによって、これらの三方言からおのおのの代表を選んだとすれば、豊日方言からは久住山東麓の(1)長湯、肥筑方言からは(2)北山となるが、薩隅方言からは代表的なものがない。(4)岡児ケ水は有声化現象、ガ行鼻音などを有する特異な方言で、薩隅方言の代表とは言えない。たしかに、(4)は研究者にとって意欲をかきたてられる方言ではあろうが、「基礎的」を標榜する以上は、まず代表的地点をかためるべきであろう。そのうえで、九州色の濃い肥筑・薩隅の二方言から、それぞれ、天草南端で薩摩の影響のあると思われる(2)深海と、薩摩半島南端で特異な現象を持つ(4)岡児ケ水をつけ足すのであればうなづける。もし、常識によらないのであれば、その理由を納得のいくように明示しておいてほしい気もする。なお、広域調査と集中調査とが同じ年度に行なわれているため、広域調査の結果が集中調査四地点選定の根拠にはなっていないと思われる。

ところで、四地点のうち、(4)岡児ケ水だけが部落単位であるが、(1)は旧長湯村（のち長湯町）、(2)は旧北山村、(3)は旧深海村などと旧町村単位の「地区」である。言語地理学では部落ごとに言語が異なると言われているので、これがやや気になる。地点ではなく地区であることは普遍性を増すという安全さはあろうが、方法論上、資料上の厳密性について問題はないものであろうか。

方言資料提供者は、各地点ともかなり多くいて結構なことである。ただ、年齢差は別としても、地区内の部落差、同一部落内の個人差があったと思われる。本書では「このようにして得られた資料を多少モデル化して、その方言体系を見定めるという行き方をしたのである」（285ページ）とある。これも一つの方法である、というより、できれば、最終的にはここまで抽象すべきであろう。しかし、最も適当な少数の人間（経歴を明示）について記述し、そのラングとしての普遍性はあとの解釈にまつとしても、とにかく資料の事実と限界をはっきり示しておくという方法もあると思われる。

調査方法の統一をはかるために厳密を期したことは特筆に価する。他の地点の集中調査に従事する全員が、まず長湯方言の調査に参加し、実際に方法を統一する実習を行なったとのことである。その成果は記述方法によく現われている。各地点とも、音韻は構造言語学的な分析、アクセントは一応の体系記述と語アクセントの報告、文法はいわゆる藤原方言学の方式かと思われる方法で文表現を記述するとともに、活用などの語形態は構造言語学的処理をし、語辞は性状表現（おもに形容詞）に関して統一ある中に種々の工夫を試みた記述をしている。四地点の形容語彙の意味分類（対照表）も興味深い。

さきに、記述方法が統一されていると言ったが、それは各項目の記述方法に地点差がないということである。一地点内部では部門ごとにかなり態度・方針の違いがあって、必ずしも整然としたものとは言えない。たとえば、音韻とアクセントとの記述態度が違っていてつなぎ合わせにくいとか、文法の内部でも、表現論と形態論とが隣り合っていたりする。これは仕方がないというより、むしろ当然であって、音韻、アクセント、文法、語彙のすべての部門にわたって、ある一貫した手法で記述するのに固執していては無理が生じ、事実をゆがめる恐れさえある。対象によって方法が定められるべきである。本書は、多分、音韻は何々式、アクセントは何々式、文法のうちシンタクスは何々式、活用は何々式、というふうに申し合わせを行なってとりかかったものであろう。そして、比較的その方式の系統の研究者をその部門に配しているようである。しかし、必ずしもその方式の系統でないと思われる研究者でも、その部門の分担となった場合は申し合わせた一定の方式によって調査、記述をしており、その能力と協力の態度は敬服に価する。

各地点の末尾に、NHK『全国方言資料』の体裁にならった方言会話の録音文字化資料がついている。NHKと違ってソノシートつきでないのは残念であるが、アクセント・イントネーション記号のついている点こちらの方がすぐれている。アクセントの項の記述と、録音資料の文アクセントの実例とが必ずしも一致していないことは研究上興味深いテーマになり得る。(2)北山方言はアクセントの型の区別がないとのことであるから、録音資料に高低の印をつけるのは苦労が多かったと思われるが、文音調研究にとって貴重なものとなろう。

集中調査全体の最後に、四地点の歴史的概観の項を設けている。これは、歴史的背景と言語との関係を安易に組み合わせず、そこがいかなる土地であったかを示す態度である。これが基礎的研究のゆえんであって、読者にとってもこの方が便利である。

この「集中調査研究」の章には三二〇ページ分、すなわち本書の半分近くの量を費している。一地点平均では八〇ページということになる。各地で市町村単位の方言集の出版されているところも見うけられるが、これだけ方言の解説をしているものはそうないし、質においてもこれの比ではない。定評ある国立国語研究所編『日本方言の記述的研究』（昭34年）とは質的に似ているが、一地点あたりの量の点でこちらが数倍となる。これに匹敵するものは『奈良田の方言』（昭32年）くらいのものであろうか。

「文献調査研究」は、九州方言を載せている上代からほぼ近世末までの文献を、国内と国外とに分けて解説を行なっている。国内のものは、『万葉集』『袖中抄』『物類称呼』『倭訓栞』『玉かつま』などで九州方言の見られる部分の指摘と解説、および『はまおぎ』『筑紫方言』『菊池俗言考』など地方的な文献の解題、合計三六点についてである。ほか、九州方言が少しだけ現われる文献四四点の書目もある。語学書や地方的な文献はともかく、全国的な一般文献の中にある九州方言の記述は、気づかれないことが多いので、非常に有益であった。

海外文献は、さすがに九州だけあって、『日本寄語』『日本一鑑』『捷解新語』『日葡辞書』『蘭日会話』など、支那、朝鮮、越南、南蛮、紅毛、英米、露にわたる中世から明治初年まで三七点の解説がある。九州方言の現われている部分の紹介と研究上の意義を説いていることは、これらの文献をたんねんに読み、しかも九州方言史に関する見識、見通しのある人でなければできない仕事である。

国内、国外ともそれぞれ語彙索引がついていて有難い。国内のものは底本と原典の仮名遣とを明示する厳密なものであるし、また使用地域をも示す点便利でもある。ただ、辞書類以外の文献で収録本に索引のないものは、出現ページをも示してもらえるともっと便利であったと思われる。海外のものについて使用地域のないのは仕方がないとしても、語形表記は、カナ見出しのほか原典のものをも示してほしかった。

所載文献はほぼ近世までであるが、明治以後も解説があればなお便利である。しかし、労力的に大変であろうし、以後は『方言と方言学』（増訂版・昭19年）、『日本の方言区画』（昭39年）などの文献目録を手がかりとすることになる。もっとも、この章の目的が九州方言研究のための参考という漠然としたものではなく、九州方言史研究の手がかりとすれば、明治末ごろまでを文献にたよるということになるのではないかと思われる。方言史の研究は、言語地理学的成果と古文献調査とによって進められるわけであるが、後者は近畿地方や江戸を除いてはなかなか得られない。しかし、幸い九州は地方には珍しく文献が豊富であり、また、それらに造詣の深い研究者がそろっている点心強い。この古文献調査研究が本書の最大の特色と言えようか。

本書全体を一応読み終えた感想は、信頼のおける方法で貴重な事実を多く提供してもらって有難いということである。今後、九州方

言を研究したり、言及したりする場合、必ず参照しなければならない、まさに基礎的文献を得た。個々の記述内容や事実の解釈については、九州方言の調査を限られた地点と日数でしか経験のないわたしに批評の資格がないので、いきおい形式や体裁を問題にしがちであるが、本意ではないことを断っておく。

用語では、「広域調査」「語辞」などと気を配っているのがうかがわれた。informant にしても、本書では「被調査者」と言うことを避けて、「方言資料提供者」と呼んでいる心づかいは方言学徒として学ぶべきであろう。しかし、まだ、この用語が必ずしも全執筆者に徹底していないらしい。「方言提供者」（4・5ぺ、418ぺ）はまだいいとして、北山（352ぺ）で「調査協力者」とあるのは、この用語が長湯（291ぺ）、深海（418ぺ）では「方言（資料）提供者」とは別に使われている（役場の係員などであろうか）だけに誤解されそうである。なお、18ぺは「方言資料提供者」という題のもとに「被調査者氏名」という欄があるのも少し気になる。

記述の方針はどうであろうか。広域調査に土地による違いのないのは当然としても、集中調査にもそれが見られないのは立派である。本書は『近畿方言の総合的研究』のような集合と異なり、全体的統一を考えてきめ細かく排列され、混ぜ合わされているという感じであるが、広域調査と集中調査の関係、一地点内における記述の態度、録音資料、古文献調査、歴史的背景などが総合、一体化されていないとも言える。しかし、総合は一人の研究者が自己の学問的体系においてなすことであれば、多人数執筆ではここまでが最高の限度であろう。これは総合のための基礎として大きな意義を持つ。総合してしまった結果を示すより、やはりこの段階で公表しておくことは良心的であり、また賢明なことであったと思われる。

九州は大家が割拠してそれぞれ独自の方式で勝手に研究をすすめているという印象を持っている人がいたら、この際認識を改めなければならない。「九州方言学会」は、科学研究費の獲得、共同調査の実施、整理、報告書の出版というところまできて、一応の目的を達したと気をゆるめることなく、次の発展に向けてさらに結集されるよう期待する。それとともに、全国的な連絡により、他地方にも刺激を与え、東北にも四国にも関東にも、このような気運の盛りあがることを祈る次第である。（昭和四四年五月、風間書房発行、七一六ページ、定価一一、〇〇〇円）

—東北大学助教授—